

# 「素戔鳴尊」論\*

## －＜父性原理＞と＜母性原理＞をめぐる問題－

早澤正人\*\*  
h8y8s3w0@yahoo.co.jp

### ＜目次＞

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1. はじめに         | 4. Maturity(成熟) |
| 2. 「男性的」なるものの成長 | 5. Elder(老年)    |
| 3. Revolt(反逆)   | 6. むすびに         |

主題語: 物語構造(Structure of a tale)、父性原理(Father Principle)、母性原理(Mother Principle)、通過儀礼(Initiation)、ユング心理学(Jungian Psychology)

## 1. はじめに

芥川龍之介「素戔鳴尊」は、大正9(1920)年3月から6月にかけて、45回にわたり「大阪毎日新聞」に掲載された小説。典拠は「古事記」であるが、ストーリーに改変が多く、前半部は、ほぼ作者の独創といってよい作品である。

もともと、芥川自身によって、いわゆる失敗作の烙印をおされた本作は<sup>1)</sup>、これまで研究者からの評価は低く、あまり注目される事のない作品ともなっている。たとえば、吉田精一は、「素朴簡古たる原文の表現に到底如かない」と評し<sup>2)</sup>、長野嘗一も、本作が「変に現

\* 本研究は仁川大学校新任教授保育事業によって研究されたものである。

\*\* 仁川大学校 師範大学 日語教育科 助教授

1) 「素戔鳴尊」が、作者にとって不本意な出来であったことは、執筆当初から述べられている。たとえば、芥川は「神代小説なんぞ書き出さなければ好かつたと聊後悔してゐます」(1920年3月29日付薄田淳介宛)「ボク毎日糞を嘗めるやうな思ひをしながら素戔鳴尊を書いてゐる一日も早くやめたい」(1920年4月4日付佐藤春夫宛)「素戔鳴の尊なんか感心しちやいかん。第一君の估(ママ)券に關る」(1920年4月27日付恒藤恭宛)などと不満を述べている。また、後に後半部のみを「老いたる素戔鳴尊」として独立させ、全体の四分の三を削除してしまったことをみても、芥川が本作を失敗作とみなしていたことが伺える。

2) 吉田精一(1958)『芥川龍之介』新潮社, p.156 ※初出は『芥川龍之介』(三省堂, 1942)

代風で中途半端な描写に始終し<sup>3)</sup>ており、「主人公素戔鳴尊の性格から野生の魅力がみじんも感じられない」と評している<sup>3)</sup>。一方、清水康次(1994)や、鶴田欣也(1986)のように、作品を詳細に分析している論考もあるが、総じてその評価は高くない。

たしかに、先行論者の指摘する通り、「素戔鳴尊」は、読者に訴える描写の迫力に欠け、原話と比べて、荒々しく野性的な魅力に乏しい作品と言えるだろう。しかし、失敗作といっても、「素戔鳴尊」は、もともとは芥川にとって、相当な力作として構想された作品でもあった。たとえば、それは本作が二年もの構想期間を経ているという事実にも表れている<sup>4)</sup>。当初の構想を書いた芥川自身のメモを見よう。

- 素戔鳴尊— 1) Revolt 2) Maturity 3) Elder
- 日本武尊— (1) 運命の軽蔑 Pride(熊襲) (2) 運命に祝さる(焼津)
- (3) 運命に呪はれつつ免る(姫) (4) 運命の勝利(伊吹山)

これは大正7年頃のものとして推定される「手帳2」のなかの記述であるが、これを見ると「素戔鳴尊」は、「Revolt(反逆)」→「Maturity(成熟)」→「Elder(老年)」の三段階の成長過程に基づいて構想されていた事が窺える。これは現行の物語の展開に即していえば、高天原で暴動を起こす話までが「Revolt(反逆)」、その後、大蛇を退治し、妻を得、家庭を構える話までが「Maturity(成熟)」、最後、老人となって醜男と争う話が「Elder(老年)」にそれぞれ相当しているといえる。

しかし、こうした構想は、結局、十分に形象化されることなく、失敗してしまう。その理由としては、原稿を執筆するための時間が不足していたという事が挙げられる。というのも、「素戔鳴尊」が執筆された当時、芥川は「或敵討ちの話」を「雄弁」5月号に書いていたのであるが、この掛け持ちによって「毎日殆ねる間もない」程多忙となってしまったのである。そして、時間が十分に確保できなかった前半部は、後に切り捨てられ、後半部(Elder)だけが「老いたる素戔鳴尊」という独立した短編として改変された。従って、このような本作は、前半部(とりわけ「Maturity」の部分)の書き込みが不足で、素戔鳴が高志の大蛇と対峙する場面などは切り捨てられてしまっており、後半部(Elder)との間にも、内容的に不連続

3) 長野嘗一(1967)『古典と近代作家—芥川龍之介』, p.270

4) 「素戔鳴尊」が、「二年間も温存」され、作者にとって力作として構想されていたらしいことは、長野前掲書のなかで指摘されている。もっとも、長野によれば、芥川はこの当時、大阪毎日新聞に「邪宗門」、「路上」という二つの失敗作を発表しており、同新聞社に対して、甚だ不面目な状態にあったとし、そのような意味でも「素戔鳴尊」にかかる意気込みは大きかっただろうと推測している。

性が認められるようなものとなった。

いずれにせよ、かかる事情もあって、「素戔鳴尊」は、作品として十分に形象化されなかったのである。もっとも、失敗作といっても、その事は直ちに作品が無価値であるという事を意味するものではないだろう。むしろ失敗作だからこそ、見えてくる問題というものもあるのではないか。特に「素戔鳴尊」の場合、前述の通り、構想期間の長いものなので、それなりに重要な問題を含んでいると考えられるのである。従来、ほとんど論じられる事のなかった「素戔鳴尊」であるが、今回は「Revolt」→「Maturity」→「Elder」の成長過程を、今一度、仔細に読み直してみることで、本作の抱える問題について考察してみることにしたい。

## 2. 「男性的なるもの」の成長

「素戔鳴尊」の物語は、素戔鳴と高天原の若者との「力競べ」のエピソードから始まる。この「力競べ」は、最初、弓の〈技量比べ〉に始まり、次いで〈跳躍比べ〉、〈腕力比べ〉と三段階に分かれて展開していくが、これはいわば強者である素戔鳴が、その強さのゆえに周囲に疎まれ孤立していく過程を、順を追って段階的に提示したものといえる。

もっとも、この冒頭部のエピソードは、一見、高天原の何気ない風景が、語られているように見える。しかし、そのように読むと、話の整合性として、ひどく不自然な点も生じてしまう。例えば、「一」における以下の場面である。

「白羽の矢が舞い上る度に、ほかの若者たちは空を仰いで、口々に彼の技倆を褒めそやした。が、その矢がいつも彼等のより高く揚る事を知ると、彼等は次第に彼の征矢に冷淡な態度を装い出した。のみならず彼等の中の何者かが、彼には到底及ばなくとも、かなり高い所まで矢を飛ばすと、反つてその方へ賛辞を与えたりした。」

ここで確認できることは、高天原の若者と素戔鳴の間には面識がないという事であろう。というのも、もし素戔鳴が高天原の住人であるとするなら、こうした「力競べ」など日頃から行われていた筈であり、従って、若者達にとっても、素戔鳴の剛力など周知の筈だからである。ならば、彼等は最初から素戔鳴に「冷淡な態度」を取るのが自然の筈であるが、彼らは素戔鳴の強力を知らないような態度を取っている。これは、素戔鳴と高天原の

若者との間に面識がないためといえる。

事実、素戔嗚は後に母の形見の勾玉について、「この国の物じゃない。海の向うにいる玉造が、七日七晩磨いたと云う玉だ」と述懐しているが、こうした記述をみても、素戔嗚の故郷が、元々「海の向う」にあったという事がわかる。つまり、主人公は、異国人なのであり、物語以前は、高天原の「外」の世界にいたのだと考えられるのである。従って、この場面も、素戔嗚と高天原の若者達が、初めて出会うエピソードという事になる<sup>5)</sup>。

では、そのような異国人としての素戔嗚と、高天原の若者の相違とは、具体的にどのような点にあるのであろうか。以下の場面を見てみよう。

「彼等は彼(注・素戔嗚)の失敗の為に、世間一般の弱者の如く、始めて彼に幾分の親しみを持つ事が出来たのであった。が、彼等も一瞬の後には、又以前の沈黙に—敵意を蔵した沈黙に還らなければならない事が出来た。

と云うのは河に落ちた彼が、濡れ鼠のようになった儘、向うの汀へ這い上がったと思うと、執念深くもう一度その幅の広い流れの上を飛び越えようとしたからであった。」

ここで高天原の若者が素戔嗚を、その失敗のゆえに親しみを覚えているのに対し、素戔嗚は周囲の反応に無頓着で、あくまで跳躍の成功に拘泥している。そして、高天原の若者たちは、そうした素戔嗚の態度に反感を覚え、索然としてしまっていることが確認できる。

もっとも、こうした両者の相違は、河合隼雄の用語を借用すれば、「個の倫理」と「場の倫理」の違いというものに相当しているといえよう。河合はユング心理学の立場から、両者は、それぞれ「父性原理 / 母性原理」の相違に基づくとし、次のように説明している<sup>6)</sup>。

「母性原理に基づく倫理観は、母の膝という場の中に存在する子供たちの絶対平等に価値をおくものである。それは換言すれば与えられた「場」の平衡状態の維持に最も高い倫理性を与えるものである。これを「場の倫理」とでも名づけるならば、父性原理に基づくものは「個の倫理」と呼ぶべきであろう。それは個人の欲求の充足、個人の成長に高い価値を与えるものである。」

5) ちなみに、山梨県立文学館には、現在、「素戔嗚尊」の草稿原稿が保管されている。それを見ると、冒頭箇所は、最初、「雲は絶えず去来した」という風景描写から始まり、やがて「険しい山道を歩いてくる大男があった」と素戔嗚尊が登場、その後、「人間の部落」(おそらく高天原)を見下ろす、という場面から始まっている。こうした点を見ても、素戔嗚が、元々、高天原の「外部」の国から来た人間として設定されていた事が確認出来る。

6) 河合隼雄(1976)『母性社会日本の病理』中央公論新社, p.13

ここで河合も述べているように、「個の倫理」とは、本来「個人の欲求の充足、個人の成長に高い価値を与えるもの」で、「個」としての能力の伸長に価値を置くが、素戔鳴もまた、ここで強い者をよしとする単純で明い発想を見せており、彼が腕力比で「猪首の若者」に唯一友情を感じるのも、その若者が素戔鳴と力で競ったからという父性原理の発想によるものといえる。

しかし、高天原の若者たちは、素戔鳴のような調和を乱す存在を嫌悪している。彼等の価値観では、素戔鳴は程々のところで失敗して、自分達と弱さを共有しなければならない。だとすると、それは周囲との調和を重んじる「場の倫理」(母性原理)によった発想であり、高天原という母性社会のモラルといえる。素戔鳴が周囲から疎外されるのは、単に彼が強者だからというだけではなく、素戔鳴が異国人として、高天原の若者と価値観を共有出来ないからでもある。

さて、ここにみられる「父性原理 / 母性原理」の対立・葛藤は、物語の主題とも関わってくるものであり、その後も、本作において対立の基調をなしていくものともなる。その詳細については、これから本稿で見ていくことにするが、その前に、ここでは「父性 / 母性」の相違についてもう少し補足しておくことにしよう。

まず、母性原理についていえば、これは前述したように、「個人の能力」よりも「集団の絶対的平等」を旨とするもので、全てのものを等しく慈しみ育てるものとされる。しかし、一方で「個」としての成長を許さず、いつまでも子供を母の懷に留めておこうとする負の側面もある。従って個人として自立しようとする者には〈呑み込む力〉となって働くこともあるとされている。

これに対して、父性原理というのは、いわゆる〈断ち切る力〉の事である。それは子供を、その個性や能力に応じて分離し、母性がすべての子供を平等に扱うのとは対照的に、母子一体の如き結合も切り離し、「個」としての自立を促す。しかし、父性原理は、ゆき過ぎると切断の力が強すぎて、子供を破壊してしまう負の側面も持っているという<sup>7)</sup>。

いったい、自我の成長というものが、「母からの分離」にあるとすれば、それは「母」との合一の状態から、次第に「個」として、自我を分離させ、自立させていく過程のことに他ならないだろう。自我とは、いわば父性原理と母性原理との葛藤を通して確立されていくものなのである。

そして、本作の素戔鳴の成長に見られるのもまた、そうした父性確立への志向なのであ

---

7) 河合前掲書, pp.9-10

り、「母なるもの」からの分離・独立の志向なのである。実際、主人公は、作中、一貫して「男らしさ」に拘っており、次のように述べている。

「おれになんの罪があるか？おれは彼らよりも強かった。が強かったことは罪ではない。罪はむしろ彼らにある。嫉妬心の深い、陰険な、男らしくない彼らにある。」

こうした言説を見ると、本作において、主人公の志向しているものが何であったか、伺い知ることが出来るだろう。すなわち、「嫉妬心の深い、陰険な、男らしくない」ものの克服—言い換えれば「男性的なるもの」の成長こそ、「素戔鳴尊」という英雄物語を貫く主題になっているという事である。かかる「男性的なもの」の成長に、「父権確立」の課題が含まれていると考えられるのである。

### 3. Revolt(反逆)

前述したように、「素戔鳴尊」の物語は、主人公の「男性的なるもの」の成長を大きな主題にしていると考えられるが、本稿は、続いて、こうした成長が「Revolt」→「Maturity」→「Elder」の三段階に分かれて、どのように展開していくのか、という問題について考察していく事にしたい。

まずは「Revolt」の考察から始めよう。ここでのストーリーは、先ほど述べた「力比べ」の後、高天原において、素戔鳴がつねに「人を避けて、山間の自然に親しみ」、孤独な生活を送りながら、しばしば一人哀愁に浸るというエピソードが展開されているが、注目してみたいのは、以下のような箇所である。

「何とも云いようのない寂しさが突然彼を襲う事があつた。彼はその寂しさが、どこから来るのかわからなかつた。ただ、それが何年か前に、母を失つた時の悲しみと似ているような気もちだけがいた。彼はその当座どこへ行っても、当然そこにいるべき母のいない事を見せられると、必ず落莫たる空虚の感じに圧倒されるのが常であつた。その悲しみに比べると、今の彼の寂しさが、より強いものとは思われなかつた。が、一人の母を恋い歎くより、より大きいと云う心もちがあつた。」

ここに人間的にまだ幼い素戔鳴の姿を確認する事が出来るだろう。素戔鳴は、孤独の淋しさに、甘えた感傷をもらしているが、それは死んだ母への思慕に似た感情となって表れている。漠然としてはいるが、これは、いわば「母恋い」に似た感情とってよいものである。

そして、かかる傷心状態にある素戔鳴は、一方で「母」の如き性質をもった「自然」にも慰められていく。

「自然は彼に優しくった。森は木の芽を煙らせながら、孤独に苦しんでいる彼の耳へも、人懐かしい山鳩の声を送ってくることを忘れなかった。沢も芽ぐんだ蘆と共に、彼の寂寥を慰むべく、仄かに暖い春の雲を物静な水光りを映していた(中略)彼はほとんど至る所に、仲間の若者たちの間には感じられない、安息と平和を見出した。そこには愛憎の差別はなかった、すべて平等に日の光と微風との幸福に浴していた。」

先にも述べたように、ユング心理学によれば「母性(原理)」というのは、「個人の能力」よりも「集団の絶対的平等」を旨とするものであり、全てのものを平等に慈しみ育てる側面を有しているが、(父性原理は、「個人の能力」のほうを旨として、個を他と差別化する側面を有している)、ここで「愛憎の差別」なく、「すべて平等に日の光と微風」を与える自然もまた、そうした「母性」の持つ性質を表していよう。つまり、ここでは、高天原において、絶えず孤独を抱える素戔鳴が、「母」の死を思い、自然に慰みを見出すという、いわば「母なるもの」への思慕と憧憬を覗かせた少年として描かれているという事である。

もちろん、こうした特徴は、その後の思兼尊の姪の恋愛にも表象されている。娘が素戔鳴と出会う場面について見てみよう。

「『鳩を助けてやろうと思ったのだ』

『私たちだって助けてやる心算でしたわ。』

三番目の娘(注・思兼尊の姪)は笑いながら、生き活きと横合いから口を出した。彼女はまだ童女の年輩からいくらも出てはいないらしかった。が、二人の友だちに比べると、顔も一番美しければ、容子もすぐれて潑刺としていた。(略)彼は彼女と眼を合わすと、何故という事もなく狼狽した。が、それだけに、また一方では、彼女の前にその慌て方を見せたくないと言う心もちであった。」

ここで、素戔鳴が幼児のように乱暴に振舞うのに対し、娘はまるで子供を相手にして楽

しんでいるかのような態度を取っている。後に、素戔鳴が求婚のために「母の勾玉」を渡す事などをみても明らかのように、この娘は素戔鳴にとって「母」(母親代理)と結びつく存在であるといえるだろう。

しかし、そうした素戔鳴の恋愛は、娘の「いつも取澄まして、全然彼を見知らないかのごとく、頭を下げる容子も見せなかった」といった態度や、「いつになく、人懐かしげに口元へ微笑を浮かべて見せた」などといった態度に迷わされた挙句、結局「牛飼」の若者に騙されて、失恋してしまう。そこで混乱の極みに陥った素戔鳴は、高天原で乱暴を働くことになるが、かかる素戔鳴の暴動の動機もまた、やはり主人公が心の中で思慕する「母なるもの」が冒涇された事への怒りが、要因としてあったと考えられる。

たとえば、素戔鳴は、ここで「あの勾玉は確かに渡してくれただろうな」「この勾玉を誰に貰った」と、「母の勾玉」に対して異常な執着を見せ、また、そうした「母の勾玉」が、娘の手に渡らなかった事に激怒しているが、その事は、娘と母(勾玉)とが結びつかなかったという「母恋い」の挫折を意味している。いわば、素戔鳴の「母なるもの」への思慕と期待は、ここで裏切られてしまうのである。

そして、物語は、その後、素戔鳴が暴動を起した罰として、鬚と爪を全て剥がされ、高天原を追放されてしまうエピソードへと展開していく。二日にわたって「高天原の国をめぐる山々の峰」をこえた素戔鳴は、やがて大きな洞穴に辿りつき、その中に閉じ籠もってしまうことになる。

「洞穴の中は広かった。壁にはいろいろな武器が懸けてあった。それが炉の火の光を浴びて、いずれも美しく輝いていた。(中略)素戔鳴は、この春のような洞穴の中に、十六人の女たちと放縦な生活を送るようになった。/一月ばかりは、瞬く間に過ぎた。/彼は毎日酒を飲んだり、谷川の魚を釣ったりして暮らしていた。」

この洞穴で、素戔鳴は女達と「放縦な生活」を送りながら墮落していくが、鶴田欣也も指摘しているように、ここでは「洞穴」を「子宮」(母胎)の象徴とし、その中で快樂に溺れ「去勢」(父性と男性性の喪失)されていくという「退行」のモチーフが展開されているのだろう<sup>8)</sup>。

とりわけ、大気都姫は、ここでは「太母」的存在になっている。「太母」というのは、いわゆる根源的無意識の表象とされるものである。ユング心理学によれば、人間は心理的成長の過程で、誰もが共通して心の内奥に持っている「母」の呪縛から、「母殺し」を行うことに

8) 鶴田欣也(1986)『日本文学における「向う側」—母なるもの性なるもの—』明治書院 p.182



よって解放され、離脱することが必要であると説くが、その際、意識を呑み込み、自立を妨げようとする無意識の表象が、「太母」になる。ここでの大気都姫もまた、「洞穴」という母胎の中へ、素戔鳴を魅惑し、その自立を妨げる魅力を持っているから、まさに無意識の中に呑みこみ、去勢し、殺してしまう「太母」的存在といえるのである。

いずれにせよ、〈父性/母性〉の対立は、この前半部(Revolt)では、素戔鳴が「母なるもの」を希求しながら、それに失敗してしまうというプロセスをもって展開している。そして「母恋い」に挫折した素戔鳴は、最終的には、洞穴という母胎の中に閉じ籠ってしまうのである。

#### 4. Maturity(成熟)

前章で見てきたように、「Revolt」は、もっぱら「思兼尊の姪」(母親代理)から「大気都姫」(太母)へと、素戔鳴が、二人の女性を希求していく形で、ストーリーが展開されていた。高天原において、孤独な生活を送る素戔鳴は、母を失った淋しさを思い、母なる自然に癒され、思兼尊の姪に惹かれる。また、それが裏切られると、今度は洞穴(母胎)の中に閉じ籠もってしまう(退行してしまう)。—「Revolt」では、いわば、そうした「母なるもの」への希求と葛藤が、物語の中心となっていた。

もっとも、ここに補足を加えると、見てきた展開は、同時に素戔鳴が徐々に臆病になっていくプロセスと相即するものにもなっている。たとえば、物語の冒頭「彼等の不快は未だ彼には通じなかった」とあって、周囲の者に無頓着であった素戔鳴(強者)であるが、その後の恋愛の件においては、「彼の心を相手に訴えるだけの勇氣もなかった」と、自身を恥じて臆病になり、さらに、洞穴の件においては「その怒を犯してまでも、犬を成敗しようという勇氣は、すでに彼には失われていた」となる。ここに素戔鳴の弱体化と没落傾向のある事も確認できる。素戔鳴はしばしば「俺といっしょに來い」という「父なる声」を聞きながらも、そうした「母なるもの」に捕われてしまう。いわば、彼は一方で「母」を拒絶しつつ、同時にそれを希求してしまうのだといえる。

では、そのようにして墮落していった素戔鳴は、その後、どのような変貌を遂げるのか。以下、「Maturity(成熟)」の件を見ていくことにしよう—物語はその後、素戔鳴が大気都姫を殺害する場面へと展開していく。ストーリーを確認すると、ここでは、先の洞穴生活

の続きとして、素戔鳴が次第に腑抜けになり、女達からも軽んじられるようになる話が描かれていく。素戔鳴は、酒に酔って泣き暮らすが、ある夜、とうとう怒りに我を忘れて暴れ回り、偶然にも大気都姫を殺害してしまう。「息苦しそうな呻き声」を発した素戔鳴は、「穢れ果てた自己に対する憤懣」を抱えて、そのまま洞穴の外へと飛び出し、失神してしまうのであった。

「天は、いよいよ暗くなった。風雨も一層力を加えた。そうして一突然彼の眼の前が、ざらざらと凄まじい薄紫になった。山が、雲が、湖が皆半空に浮かんで見えた。(中略)彼は砂の中に半ば顔を埋めたまま、身動きする気色も見えなくなった。」

ここで注意したいのは、「身動きする気色も見えなくなった」とある事である。というのも、ここで素戔鳴が意識を失うのは、単なる気絶ではない。この失神には、それまでの墮落した生き方を清算するための、いわば〈象徴としての死〉といった意味が込められていると考えられる。つまり、これは〈古い自分〉から〈新しい自分〉へと移行するための、通過儀礼(イニシエーション)的な意味での〈死〉という事である。

事実、この後、目が覚めると、素戔鳴の世界は一変する。

「何時間が過ぎた後、失神した彼はおもむろに、砂の上から起き上がった。彼の前には静な湖が、油のように開いていた。空にはまだ雲が立ち迷ってただ一幅の日の光が、ちょうど対岸の山の頂へ帯のように長く落ちていた。そうしてその光のさした所が、そこだけほかより鮮かな黄ばんだ緑に仄めていた。(中略)その内に雲の影が移って、彼を囲む真夏の山々へ、一時に日の光が照り渡った。山々を埋める森の緑は、それと共に美しく湖の空に燃え上った。この時彼の心には異様な戦慄が伝わるのを感じた。」

ここにおいて、素戔鳴は劇的に〈新生〉する。——「湖の水を浴びて、全身の穢れを洗ひ落とすのは、いわば「禊(みそぎ)で、憑き物をおとして再生するという儀式的な意味合いを有しており、主人公の「生れ変わり」を表していると考えられる。すなわち、それまで母を慕ったり、洞穴(母胎)の中に閉じ籠もったりして、弱体化(退行)していった素戔鳴は、ここで一旦「死」に、それまでの穢れも洗い清められて、新しく生まれ変わるような体験するという事である<sup>9)</sup>。

9) この箇所素戔鳴の「新生」を見ているものとして、他に清水康次(1994)『『野生』の系譜』『芥川文学の方法と世界』和泉書院、と鶴田欣也前掲論の論が挙げられる。清水はこの箇所、素戔鳴の野生が「反

また、素戔鳴はここで「高麗劍」も入手する。

「枯木の根本には一振の高麗劍が竜の飾のある柄を上にはほとんど鏝も見えないほど、深く突き立っていたのであった。彼は両手に柄を掴んで、渾身の力をこめながら、一気にその劍を引き抜いた。」

劍というのは、神話の世界では、英雄が多く「自立」の象徴として、その身に帯びるものであるが、ここでの「高麗劍」もまた、新生した主人公の獲得した(「断ち切る力」としての)「父性」を象徴しているといえるのだろう。

さらに、ここで季節もまた〈春〉から〈夏〉へと転換していくが、これによって、それまでの〈母を希求する「春」の物語〉から、〈母を克服する「夏」の物語〉へ、というモチーフの大きな転換も、はかられていく。実際、素戔鳴は、この後、高志の大蛇と対決していく事になるが、ユング心理学では、英雄がそのように竜(大蛇)と戦い、これを退治する神話には、「母殺し」の主題があるとされている。E・ノイマンの説明をみよう。

「母の克服すなわち母殺しは英雄の「竜との戦い」神話の中の、一つの層である。自我が男性化に成功したことは、自我が戦士としていつまでも闘う用意のあることに、また竜によって表されている危機に自ら曝そうという意志に、表れている。(中略)英雄の『竜との戦い』のテーマはつねにウロボロス竜による精神的男性的固有原理への危害である、すなわちこの原理が母性的無意識に呑み込まれる危険である。」  
— 林道義訳(1984), p.226

ノイマンは、ここで神話における「竜殺し」の話—例えば、ファーフニルを退治するジークフリート(北欧神話)や、ティアマットを退治するマルドゥーク(バビロニア神話)などのような「竜殺し」の話—は、人間の自我の発達段階において、母性から自立していく「母殺し」の位相を表象しているのだと述べている。

だとすると、本作において、素戔鳴が対決する「高志の大蛇」もまた、〈巻き込むもの〉〈呑み込むもの〉という根源的無意識の表象としての「太母」の具現化した姿であるといえるのだろう。とりわけ、ノイマンは、「運命」の謎をかけて、その問いに答えられない人間

---

社会的な、反逆的な力」から「孤独な漂泊者・闘争者の内面を支える力」に変化すると説き、鶴田はこの箇所では、主人公の穢れが清められることを説いている。本稿では、鶴田のような理解に準拠しつつ、ここで「春」から「夏」にかけて、素戔鳴が「母の拘束力」から脱していくという父権 / 母権の関係性で読んだ。

を破滅させるスフィンクスのような怪物も、「太母」の表象としてとらえているが、ここでの素戔嗚も「神々の謎を解く」といい、いわば謎解きの形で、「大蛇退治」—すなわち、「母殺し」を敢行しようとしているのだともいえる。

ともあれ、そのような「生まれ変わり」を体験した素戔嗚は、その後、一人で各地を放浪し、最終的に、母の克服(「高志の大蛇」退治)へと向っていく。もっとも、そうした素戔嗚は、もはや、高天原を去ることに逡巡し、淋しがっていた頃の彼ではない。主人公は成熟し、「個」としての自立を、ほぼ成し得た存在となっていく。以下、櫛名田姫に出会った時の場面を見てみよう。

『「御安心なさい。私は何もあなたの体に、害を加えようと云うのじゃありません。ただ、あなたがこんな所に、泣いているのが不審でしたから、どうしたのかと思つて、舟を止めたのです』と云った。(中略)女は黙って、首を振つた。その拍子に頸玉の琅玕が、かすかに触れ合う音を立てた。

彼はこの子供のような、否と云う返事の身ぶりを見ると、我知らず微笑が唇に上つて来ずにはいられなかった。(中略)

『では、一ではどうしたのです。何か難儀な事でもあつたら、遠慮なく話して御覧なさい。私に出来る事でさえあれば、どんな事でもして上げます。』

ここで、自ら積極的に櫛名田姫に話しかけている素戔嗚は、前半部で女性(思兼尊の姪)と碌に話も出来なかった彼とは別人のようである。一女性に対するこうした態度の変化にも、「男」として成熟した素戔嗚の姿を窺い知ることが出来るのである。

## 5. Elder(老年)

これまで本稿は「素戔嗚尊」における「Revolt」から「Maturity」にかけての展開について考察してきた。

内容を確認すると、この前半部では、通過儀礼的な話型を踏まえた上で、主人公が男性として成長していく展開になっていた。すなわち、「Revolt」では、素戔嗚は、人間的にいまだ幼く、「母恋い」を中心としたモチーフが展開されているが、それに挫折すると、今度は洞穴(母胎)の中に閉じ籠もってしまう。そこに素戔嗚の弱体化と退行も認められるが、

その後の「Maturity」において、主人公は〈象徴としての死〉を経て、〈新生〉する。そして、「個」として成熟した素戔鳴は、各地を放浪した後、「龍退治」=「母殺し」に向かっていくという事であった。

もちろん、「素戔鳴尊」の物語は、これで完結するわけではない。冒頭でも述べたように、物語は、この後、さらに「Elder」へと展開し、素戔鳴の「老年時代」(「老いたる素戔鳴尊」)が描かれていく事になる。もっとも、ここでの内容としては、大蛇と対峙して以降、老年となった素戔鳴が、異国からやってきた葦原醜男と、娘をめぐる競い合うという話を中心になっており、「蜂の室のエピソード」や「蛇の室のエピソード」など、四つのプロットで構成された「難題譚」の形式をふまえた物語となっている。従って、前半部の物語(「春」から「夏」にかけて主人公の成長していく前半部の物語)との間には、断絶が認められ、二つの作品は、それぞれで別の話となっている。

それゆえ、この「Elder」については、他日また、別に論じなければならないが、「Revolt」→「Maturity」→「Elder」の展開を考察する上で、あえて一言しておけば、その後の「Elder」の物語では、老年になった素戔鳴が、葦原醜男との対決を経ることで、さらに「神々に近い存在」へと飛躍していくという事が挙げられる。

たとえば、海老井英次は、初出と定稿の記述の相違も踏まえた上で、この箇所について、次のように分析している。

「……〈死は素戔鳴夫婦をも赦さなかった〉という現実があり、醜男への不快もあまりに人間的なものに描かれている。結びの語〈神々に近い〉との関連で、結末のほうが書き改められているが、それはたとえば〈雷のやうに唸りながら〉(初出)が、〈稜威の雄たけびを発しながら〉に改められたように、あまりに人間的な素戔鳴の姿を神格的な存在に高めていく作品世界の展開を補佐する改変であったろう。〈炉辺の幸福〉から〈神々の世界〉へ、老いたる素戔鳴は飛翔する」

— 海老井英次(1979), p.108

ここで海老井は、「Elder」では「炉辺の幸福」を営む素戔鳴が、醜男との対決を経て、さらに「神格的な存在」へと高められると述べている。これは本稿の文脈に即していえば、素戔鳴が父親として、最終的には娘への執着を断ち切り、〈祝福するもの〉へと変貌していく場面になっているという事である。いわば、ここでも「断ち切る力」としての父権の発動によって、素戔鳴がさらに高い人格—神格化された存在へと飛翔する様子が見取れるので

ある。だとすれば、「Revolt」→「Maturity」→「Elder」の構想とは、具体的には、素戔嗚が父性原理(断ち切る力)に基づいて、「少年」から「父」へ、その後、さらに「父」から「神」へと上昇していくプロセスだった、と結論する事が出来るだろう。

## 6. むすびに

以上、本稿は、「素戔嗚尊」の「構想メモ」にある「Revolt」→「Maturity」→「Elder」という三段階の成長過程が、具体的にどのような形で作品に表象されているのか、という問題について、主に「父性 / 母性」をキーワードにしつつ考察してきた。

概していえるのは、芥川の描く素戔嗚の英雄像が、「通過儀礼」的な問題も踏まえながら、「少年」→「父」→「神」へと上昇していく父権確立の志向を備えた英雄になっているという事であるが、このような展開をみると、芥川の描く「素戔嗚尊」の特徴や、日本神話における素戔嗚との違いも明らかになるかと思われる。最後にこの問題について一言しておこう。

というのも、日本神話のササノヲというのは、本来は「永遠の少年」などとよばれ、「成熟しない英雄」とされているのである。この「永遠の少年」というのは、吉田敦彦によれば、「母殺し」と思われる行為を何度も繰り返しながら、その度にまた母の元に帰ってきってしまう英雄の事とされている。(いわば、「母」の拘束力から、いつまでも脱することの出来ない英雄の事である。)以下、長い引用になるが、吉田の説明を見よう。

「(注・ササノヲは)ユング派心理学の用語を使って言えば、「永遠の少年」プエルアエテルヌスでもある。つまり元型的母の拘束力から離脱して、自覚的に責任を果たす大人に成長し自立を遂げることがいつまでもできずに、神話の中で最後まで、甘ったれたただっ児のような性質を、すこぶる露骨に発揮し続けていると認められるのである。(略)高天原では彼は、姉のアマテラスに対してまさに、母の慈愛に甘えて悪戯の限りを尽し、そのあげくしまいについて放置できぬ破滅的事態を引き起こしてしまっただけで仕置きを受けねばならなくなる、典型的なただっ児の振舞をした。つまり彼は、アマテラスを、いない母親の代理に見立てることで、母に固着した赤児のままにいたい願望を満足させようとしたと見る事ができる。

アマテラスに対する傾慕の情を、ササノヲは、高天原から追放されたあともなお、明らかにれんれんと持ち続けた。なぜなら彼は、ヤマタノオロチを退治したあとで、この怪物の中の尾

から自分がせつかく獲得した神劍のクサナギの劍を、アマテラスに贈ったとされている。つまり高天原を追われることによって、アマテラスの側から遠く引き離されても、スサノヲはこの姉に対して、心理的には相変わらず、母に対する赤児のようにべったりと固着したままの関係を、保持し続けていたのである。(略)スサノヲのプエル アエテルヌス的な本性には、ヲロチ退治の功業を遂げたあとも、目立つほどの変化は何も起こっていないと言ってよいと思われるのである。

事実このあとスサノヲは、出雲の須賀に宮殿を建て、そこでヲロチ退治により生命を助けてやったクシナダヒメと結婚するが、地上に長くは留まらず、やがて地下の根の国に行きそこに住み着く。(略)根の国の主と成って住むことによって、スサノヲはある意味ではたしかに、地母の胎内に呑みこまれたような胎児のような状態に身を置き、求めて止まらなかった母との固着をついに自分の身に実現することができたと言えよう。しかしそれにもかかわらずスサノヲは、根の国においてもなお、分離と自立を何がなんでも拒否しようとして我武者羅に振舞うプエル アエテルヌスの本性をむき出しにする…」

—吉田敦彦(1989), pp.146-149

これは、日本神話のスサノヲを、ユング心理学に基づいて考察したものであるが、こうした吉田の見解を踏まえていけば、芥川の描く素戔鳴との違いもまた、明確になってこよう。というのも、繰り返しになるが、本作は「Revolt」→「Maturity」→「Elder」と展開するにつれて、主人公が「少年」→「父」→「神」へと上昇していき、人格的に成熟していく。従って、このような芥川版の素戔鳴は父権確立を目指して上昇していく英雄になっている。しかし、原話のスサノヲはそうではない。吉田の述べているとおり、日本神話のスサノヲは、女性の肉親に対して、幼児的に執着し続ける永遠の未成熟さを持ち続けるのである。

もっとも、こうした芥川版「素戔鳴尊」の特徴は、この時期芥川の抱えていた問題とも重なり合っている。というのも、この作品の掲載された大正9(1920)年3月から6月、芥川龍之介は、作家として自立していくべき大切な時期に差し掛かっていたのである。たとえば、漱石死去(1916年12月)、結婚(1918年2月)、大阪毎日新聞社入社(1919年2月)、実父死去(1919年3月)、長男誕生(1920年4月)などがあるように、当時、芥川は家長として、作家として自立していく大切な時期に当たっていた。本作に父権確立の構想が強く残されているのは、そうした芥川の当時の状況も関係しているのだろう。

いずれにせよ、芥川はこの時期、神々の世界を目指して上昇していく野蛮な英雄—父権確立に向けて成長していく英雄の姿を描くことを目論みながら、それに失敗したのであって、冒頭で述べたような単なる「野生美」の失敗のみが問題なわけではない。こうした父

権確立の主題は、この「素戔鳴尊」以降、影を潜めていくことにもなるのであるが(たとえば、この後の「雛」や「玄鶴山房」では、哀愁の漂う弱々しい父親が登場してくる)、それが意味するものとは何なのか。そうした問題については、本論で論じる用意はない。ここでは問題提起に留めておいて、自身の今後の研究活動のなかで明らかにしていく事としたい。

[付記] 本稿は「第208回 芸術至上主義文芸学会」(2007年4月15日)において口頭発表したものに、加筆・修正を加えたものである。

### 【参考文献】

- 海老井英次(1979)「芥川文学作品論事典」『芥川龍之介必携』学燈社, pp.107-108  
河合隼雄(1976)『母性社会日本の病理』中央公論新社  
清水康次(1994)『『野生』の系譜』『芥川文学の方法と世界』和泉書院, pp.233-261  
鶴田欣也(1986)『日本文学における「向う側」-母なるもの性なるもの-』明治書院  
長野嘗一(1967)『古典と近代作家-芥川龍之介』友朋堂, pp.238-270  
羽鳥徹哉(1975)「傀儡師の誤算」『国文学』20巻2号, pp.113-118  
林道義訳(1984)『意識の起源史』紀伊国屋書店. Erich Neumann, *Ursprungsgeschichte des Bewusstseins.*(1949)  
吉田敦彦(1989)『日本神話の特色』青土社, pp.146-149  
吉田精一(1958)『芥川龍之介』新潮社 p.156 ※(初出は『芥川龍之介』(三省堂1942))

---

논문투고일 : 2015년 03월 10일  
심사개시일 : 2015년 03월 20일  
1차 수정일 : 2015년 04월 08일  
2차 수정일 : 2015년 04월 14일  
게재확정일 : 2015년 04월 20일

---



---

## 〈要旨〉

---

### 「素戔鳴尊」論

－ 〈父性原理〉と〈母性原理〉をめぐる問題－

芥川龍之介の「素戔鳴尊」(「大阪毎日新聞」,1920)という作品は、作者のメモによれば「Revolt」→「Maturity」→「Elder」という三段階の成長過程によってストーリーが展開されていくが、この三段階の成長過程とは、本文に即して考察すれば「少年」だった素戔鳴が「父親」として成長、そこからさらに「神」へと発展していくプロセスだったといえる。もちろん、このような成長過程は、原典である日本神話のスサノヲにはみられない。日本神話のスサノヲは「永遠の少年」などといわれ、永遠に「母離れ」の出来ない未成熟な英雄として描かれているのである。従って、芥川版・素戔鳴尊は、原話に比べ「父権確立」の志向が強く打ち出された英雄になっていることがわかる。ここに芥川文学における父性の問題も提起することが出来るであろう。

### A Study of “*Susanoo no Mikoto*” by Ryūnosuke Akutagawa

－ “Father Principle” and “Mother Principle” －

Ryūnosuke Akutagawa’s *Susanoo no Mikoto* (Osaka Mainichi Shimbun, 1920), according to a note by the author, is a story that was developed through a three-step process: “Revolt” to “Maturity” to “Elder.” Based on the text, one can say this three-step growth process involves *Susanoo no Mikoto*, a young boy, growing into a father and then becoming a god. Of course, this growth process is not evident in the original Japanese myth of *Susanoo*. In the myth, *Susanoo* was described as being eternally youthful, and he was depicted as an immature hero who was perpetually unable to separate himself from his mother. Unlike in the original legend, the hero of Akutagawa’s *Susanoo no Mikoto* exhibits a strong desire to establish his paternal rights. This characteristic shows that Akutagawa’s version includes the problem of failure to construct a tale of the establishment of paternal rights. However, it can likely be used to raise the question of what paternity means in Akutagawa’s literature.